

大垣新田藩領渥美郡畠村に進出した知多大野商人

石川 洋一

はじめに

深井甚三氏によれば、近世の海運網の完成は、周辺地域間の海路（「小廻し」）による物資流通が充実し、その拠点から遠隔地を結ぶ（「大廻し」）航路と二重になり、全国的海運網が形成されるという⁽¹⁾。伊勢湾と江戸・大坂を結ぶ廻船が発達していたことは、近年研究が深められ、実態が明らかにされている⁽²⁾。その江戸・大坂廻船の研究成果にもとづけば近距離の海上輸送及び交易についても、盛況であったと思われる。ただ、古くから伊勢湾・三河湾の海上交通は盛んだったといわれているが、具体的な研究は多くない。

村瀬正章氏は、伊勢湾は比較的早くから漁労や軍事、伊勢神宮へ朝貢・参詣、商いの発達などにより海上交通は発達していたことを指摘し、渥美半島先端部に位置する畠湊について、「この（吉田の）ほか田原藩の外港である船倉・畠・高足・大崎などの湊がある。畠は渥美半島の入り口にあつて、知多郡大野村の人が多く住みついており、舟の便がよく、渥美郡西南部水運の中心になっていた。商人が軒を並べて都会のようであったという。薪・松葉・柴などを艀（にたり）に積んで、伊勢・尾張・三河の塩浜へ運ぶほか、海藻や木綿を積み出し、その繁栄は奥郡第一といわれた」と述べている⁽³⁾。

青木美智男⁽⁴⁾氏は知多半島の村々と伊勢・三河湾沿岸地域との結びつきを、「寛文村々覚書」から各村々の「道法」に記された地名から分析している。とくに『尾張徇行記⁽⁵⁾』・『知多郡之記⁽⁶⁾』の検討により、知多半島東浦の村々の道法のなかに、刈谷、西尾、大浜、平坂など西三河の地名が見られ、三河との結びつきが強いことを、西浦の村々のそれには、桑名、四日市、白子、大湊、山田、河崎、鳥羽の地名があることから伊勢湾岸村々との結びつきの深さを指摘している。知多半島の村々と東三河の関係については、大井村の道法に吉田が存在することをあげている。

本稿で取り上げる尾州大野をはじめとする知多半島地域と渥美半島先端地域との関係については、漁民の漁場をめぐる緊張関係⁽⁷⁾や船の遭難・漂流、渥美から燃料として松葉・松小枝の移出⁽⁸⁾などが知られている。今日の陸上交通体系では、地理的に疎遠な地域であるが、水運が主な輸送手段であった前近代では、海上交通による人や物資の行き来は盛んであったと思われる。正徳期の畠村に知多商人が出店を構えた事実がある⁽⁹⁾。小さい村の事例であるが紹介し、伊勢湾・三河湾をめぐる知多商人の活動の一端を考えていきたい。

畠村は渥美半島三河湾側先端部に近いところ位置し、福江湾の奥まったところにある。免々田川河口に発達した湊をもち、中山湊、

古田湊とともに奥郡の海上交通の要となっている。ここには、大垣新田藩の三河支配地渥美郡六カ村額田郡五カ村（現岡崎市）を束ねる陣屋が置かれており、奥郡といわれた半島先端部の中心的な村である。畠村の有力者は、その渥美郡6カ村の畠村・古田村・向山村・亀山村・日出村・伊川津村の組合村割元を、さらに11カ村を束ねる組合村の元締の役割も勤めている。

1 畠村への他地域からの出店

宝永4年(1707)の『三河国渥美郡畠村差出シ御帳⁽¹⁰⁾』によれば、畠村は家数177軒(内135軒役家高持・43軒小高持小役)、人数937人(内男455人・女472人)の村である。同差出帳から商店、荷ない商人の部分抜き出してみる。

一商店	拾貳軒
内	
壹軒	味噌・塩・酢・酒色々商耕作致両かせきニ仕候 善八
壹軒	右同断 五助
壹軒	右同断 新兵衛
壹軒	右同断 市郎兵衛
壹軒	右同断 与右衛門
壹軒	右同断 久六
壹軒	味噌・塩・酢・酒・綿商売仕候 次郎右衛門
壹軒	右同断 弥三郎
壹軒	右同断 新三郎
壹軒	右同断 里平
壹軒	味噌・塩・酢・酒・綿商売仕候 市左衛門
壹軒	右同断 惣左衛門
一茶売、荷ない商人	七人
壹人	耕作をも致、両かせきニ仕候 徳三郎
壹人	右同断 藤兵衛
壹人	右同断 金三郎

壹人	右同断	惣七
壹人	右同断	佐右衛門
壹人	右同断	七郎兵衛
壹人	右同断	市兵衛

商店は12軒を数える。そのなかで前半の6人は「味噌・塩・酢・酒色々商耕作致両かせきニ仕候」と味噌、塩、酢、酒、さらに色々な物を商っていて、田畑の耕作もしているという。耕作は作男にさせているかもしれないが分からない。他の6人は、味噌、塩、酢、酒、綿を商っているという。前者との相違点は、後者は、前者に記載のない「綿」を商っていることと「耕作致両かせきニ仕候」の文言がなく商いをもっぱらとしていていると思われることである。荷ない商人は、7人であり、皆茶売りをしながら田畑を耕作するという。商店、荷ない商人と合わせて、商人は19人である。

つぎに、4年後の正徳元年(1711)の『三河国渥美郡畠村差出シ御帳⁽¹¹⁾』を見てみよう。

一商店	貳拾軒
内	
壹軒	味噌塩酢酒穀類諸色々宛商耕作致両かせき仕候 善八
壹軒	右同断 惣大夫
壹軒	右同断 惣休
壹軒	右同断 覚右衛門
壹軒	右同断 善左衛門
壹軒	右同断 佐右衛門
壹軒	右同断 新兵衛
壹軒	右同断 喜右衛門
惣休かし家 壹軒	味噌塩酢酒綿諸色々賣仕候 尾州柴崎村 利右衛門
喜右衛門かし家 壹軒	右同断
尾州大野木ノ下村	権右衛門
善助かし家 壹軒	右同断
尾州大野木ノ下村	市左衛門
佐右衛門かし家 壹軒	綿諸色
尾州大野北浦町	利平
善助かし家 壹軒	酒諸色
幡豆村	十助

傳助かし家 壺軒 綿諸色 尾州大野北浦町 次郎右衛門	一借宅荷イ商人 内	三軒
与右衛門かし家 壺軒 綿諸色 尾州名古屋杉町 与八	惣次郎かし屋 壺軒 鍋売	近江国栗太郡辻村 清吉
五助かし家 壺軒 綿諸色 尾州大野高須賀町 九三郎	喜右衛門かし屋 壺軒 茶売	尾州大野柴崎村 藤八
五平次かし家 壺軒 綿諸色 尾州大野北浦町 十兵衛	善八かし屋 壺軒 茶売	尾州大野新町 四郎三郎
甚太郎かし家 壺軒 綿諸色 吉田田町 九左衛門	善八かし屋 壺軒 茶売	幡豆郡谷村 弥三郎
勘四かし家 壺軒 綿諸色 尾州大野高須賀町 平七	源三郎方ニ罷有候 一鍋売出入荷イ商人壺人	近江国栗太郡辻村 源八
惣休かし家 壺軒 尾州大野大草村 彦八	一出入茶売商人壺人 内	
4年前の宝永4年と比較すると、地元商人は、12軒から8軒に減っている。善八と新兵衛の2人だけが残っているだけで他の6人は新たに参入している。彼らは、「味噌塩酢酒穀類諸色少々宛商耕作致両かせぎ仕候」であり、商いをしながら常に片足は田地耕作にある。また、商いの規模も小さいと思われる。地元商人の扱ひ品目は「味噌塩酢酒穀類諸色少々宛商」であり、宝永4年の次郎右衛門、市左衛門がかかわった「綿」の文字がない。	半七郎方罷有候 壺人 三四郎方罷有候 壺人	若見村 多吉 額田郡檜山村 清九郎
宝永4年と顕著な違いは、地元より多い12人の村外から入った商人である。彼らの商いの品目については、利右衛門、権右衛門、市左衛門の3人は「味噌塩酢酒綿諸色」、十助は「酒諸色」、他の7名は「綿諸色」とある。「綿諸色」は「諸色」とあるものの「綿」関係を主とした商行為であろう。店借商人の多くは味噌、塩、酢、酒の販売というより綿関係の取引が主となっていると思われる。「綿」を扱う入商人11人の内10人が尾州大野、1人が尾州名古屋である。	村外から荷ない商人として入った者は、7名である。鍋売り2人、茶売り5人である。鍋売りは江州栗田郡辻村の2人、茶売りは尾州大野の者2人、幡豆郡谷村、若見村(田原藩領表浜の村)、額田郡檜山村(大垣新田藩領額田郡5カ村のうちの1つの村)からそれぞれ1人である。	
商人の出身地は、尾州柴崎1、大野木下2、大野北浦3、大野大草1、大野高須賀2、名古屋1、はず(幡豆)村1、吉田田町1である。ほかに家を借りて、あるいは、間借りなどしていた借宅荷ない商人を見てみよう。	一荷イ商人 拾六人 内 壺人 茶売 耕作致両かせぎニ仕候 壺人 茶売申候而 耕作致両かせぎニ仕候 壺人 塩小売仕候而 耕作致両かせぎニ仕候 壺人 こんにゃ売候而 耕作致両かせぎ仕候 壺人 茶売候而 耕作致両かせぎニ仕候	忠蔵 藤兵衛 奎左衛門 伝八 惣吉

壹人 塩売候而	彦兵衛	同国同郡上畠村七郎左衛門子	
耕作致両かせきニ仕候		弥三郎売子	十助
(後略)			

「壹人 茶売 忠蔵 耕作致両かせきニ仕候」と「耕作いたし両稼ぎ」とあるのでおそらく、畠村の者で田畑の耕作をしながら、商いにも従事していたと思われる。荷ない商人は宝永4年と比較すると7人から16人へと急増している。彼らの商う品目は、茶売12人、塩売3人、こんにゃく売1人である。

この村差出帳は、正徳元年(1711)のものであるが、それより2年前『宝永六己丑年六月三河国渥美郡畠村人別生死増減住所改帳⁽¹²⁾』(1709)に畠村に移入した74人の中に渥美郡外から移入した28人の名がある。

一徳兵衛後家	メ三人 当村甚三郎借家		
一壹軒 尾州知多大野木下町太良兵衛子			
入商人	権右衛門		
同国同郡柴崎村助右衛門子			
右之売子	藤八		
尾州知多郡大野奥子村伝右衛門子			
同	行六		

メ三人 当村惣太夫借家			
一壹軒 尾州知多郡柴崎村久三良子			
入商人	利右衛門		
尾州知多郡柴崎村重右衛門子			
右之売子	与惣兵衛		
同国同郡北糟谷村善兵衛子			
右之売子	源六		

メ壹人 当村善助借家			
一壹軒 尾州知多郡大野村市郎右衛門子			
入商人	市左衛門		

メ三人 当村善左衛門借家			
一壹軒 同国幡豆村東幡豆谷村忠兵衛子			
入商人	弥三良		
同国同郡小見行村清右衛門子			
右之売子	清五郎		

メ貳人 当村惣次郎借家			
一壹軒 江州栗本郡辻村弥次兵衛子			
入商人 鍋屋	弥次兵衛		
同国同郡兵津村庄兵衛子			
右之売子	清吉		

メ貳人 当村佐右エ門借家			
一壹軒 尾州知多郡大野北浦町源右衛門子			
入商人 綿屋	利平		
同国同郡同村権銀町久兵衛子			
右之売子	九十良		

メ貳人 当村伝助借家			
一壹軒 尾州知多郡大野北浦町権四良子			
入商人	次郎右衛門		
同国同郡 右之売子	弥七		

などと記されており、宝永4年の村差出帳には、渥美郡以外の入商人は認められなかったため、ほぼ宝永5年から6年の2年間に急増したと考えられる。入商人と売子を含めて記載されている場合と売子を伴わない単独の入商人の場合がある。「壹軒メ壹人」が9人、「壹軒メ貳人」が4組8人、「壹軒メ三人」が3組9人、そして畠村の者のところに壹季奉公、年季奉公の下人として雇われた者2人がいる。それで合計28人となる。

正徳元年(1711)『三河国渥美郡畠村差出シ御帳』の入商人で既に、宝永6年に住居していた者は、利右衛門、権右衛門、市左右衛門、利平、十助、次郎右衛門、彦八、清吉、弥三郎、そしてほぼ同一人物と推定されるのは九三郎(久三良)、重兵衛(十兵衛)、多吉(太吉)、弥三郎(弥三良)である。異動については、「壹軒メ壹人」の入商人であった知多郡大野北浦町次郎七、出入木挽尾州名古屋皆戸町善右衛門・伝左衛門は、2年後にはいない。正徳元年の大野商人を中心とする入商店街は、宝永

6年(1709)には、ほぼ完成されたと思われる。また、渥美郡内より畠村に働きに出てきた者が46人(下人21人、下女25人)あり、畠村、畠湊が賑やかになっていくことがうかがえる。出身地は、ほとんど半島の先端の村々(旧渥美町)の男女であるが、一部に田原藩領越戸村(旧赤羽根町)出身者がいる。また、知多郡大野村から、男子2人が畠村の商店に働きに来ている。女性(下女25人)は皆、半期奉公、男性(下人21人)は、一季奉公、年季奉公、船手一季奉公とある。

2 入商人の活動

畠村の商店で扱っているのは‘味噌塩酢酒穀類諸色少々宛商’で綿については触れていないが、諸色に含まれる部分で少々の商いはあったであろう。それに対して尾州商人の3人は‘味噌塩酢酒綿諸色商賣仕候’と綿がうたわれているし、他の6人は‘綿諸色’という記載である。なお、幡豆村から店を出した十助は、酒諸色となっている。

さらに、借宅荷ない商人について見てみると、4人の内に鍋売1人、茶売3人、又、寄宿する形で鍋売1人(鍋売出入荷イ商人壺人)、茶売2人(出入茶売商人式人)がいる。出入ということは、常駐ではなく季節・時季をみて売りに来るという形であろうか。彼らの出身地は、鍋売の者は、近江国栗田郡辻村の2人、茶売の者は尾州大野、柴崎村・新町の2人、幡豆郡谷村、額田郡榎山村、渥美郡若見村の各1人である。また、尾州名古屋皆戸町出身者で入商人ではなく出入木挽と記された2人の名も見える。

ここで注目されるのは、綿、鍋、茶である。これらはいずれも生活必需品であるから、在来の商店でも取り扱っていたと思われる。しかし、村差出帳の記載に、商店の取り扱い品目として綿、鍋、茶の文字はなかった。畠村にとって初めて表向き綿を商う商人が一挙に

9軒出現したことになる。借宅荷ない商人や出入荷ない商人とはいえ鍋売2名、茶売5名の出現は、暮らしの面で画期的であり、生活が豊かになったと思われる。

なお、家屋を貸しているのは、名主や村役人、宝永4年には店を持っていた者のほか、船、五十集などの船の所有者が多い。店として貸した建物の大きさは分からないが、住居以外の家屋を所有している経済的にも村の中の有力者であろう。多くの重立が出店の建物を貸すからには、在来の者と入商人の間には、経済的な緊張もあったと思われるが、双方にとってのメリットも存在し、排斥や嫌がらせなどはなかったと推定される。さらに、進出者が尾州大野、知多郡柴崎村、名古屋杉町、幡豆郡谷村、幡豆村、額田郡榎山村、近江国栗田郡辻村、吉田と広範囲に渡っているし、畠村の有力者が商人を招いたとも考えられる。

なぜ、18世紀初頭、宝永4年から正徳元年の短い期間に(「宝永六年畠村人別住所改帳」に既に流入が認められる)、入商人が急増したのか。

大きな時代背景としては、江戸幕府成立以後大きな戦乱のない平和な時代が続き、新田開発、用水路の改良、単婚小家族経営による農業生産力の向上、農民の生活水準の向上、剰余生産物の市場への流れ、貨幣の流通増加、城下町の発達、市の形成、海運の発達などがあげられる。

入商人の出身地のほとんどを占める知多郡大野村については、『常滑市史⁽¹³⁾』に、「大野村は『尾張徇行記』に現れないが、寛文のころ(1661~1673)わずかな耕地に755軒を抱えながら、廻船66艘・小船52艘を持ち、湊役を納める港村であった。従って船稼をする者が多く、商品流通はたいへん進んでいた」という記述がある。時代は隔たるが、明治初年の職業分布についても、546戸のうち農業44、漁業10、工業83、商業355、その他54だという。記念誌『大野町六〇周年記念⁽¹⁴⁾』に座談会で

の、乙「大野の昔の商業といえば、木綿業と、肥料商といふことでせうな」、丙「大野木綿と云っても、それは木綿の中継業であって、その生産品は知多郡全部及三河部からも集荷されたのです」という昔を知る老人の話がある。

大野商人6人は‘綿諸色’だけの肩書きであるが、‘味噌塩酢酒綿諸色’の3人も含めてこれだけ多くの商人が、綿や布などの販売だけとは、考えられない。綿関係の資料は『渥美町史・資料編』には取り上げられていないが、宝永・正徳の頃は日本に綿が伝わり普及し始めて約100年を経ている。家族の衣服の自給自足用として、また、婦人の賃仕事として家庭での機織りが渥美でも一般化していたと思われる。大野商人は、実綿を畠村に持ち込み、それを渥美の農家の婦女子に農閑余業の賃仕事として、糸や反物に紡ぎ織らせて、持ち帰ったと理解する方が自然であろう。

大野地区では江戸時代の初期に綿作が始められたといわれている。綿作が始まると、農閑に綿を紡ぎ手織りをする者ができ、村には晒屋や紺屋ができる。知多木綿の歴史は古く、慶長年間には、生白木綿の江戸送りが始まったと伝えられている。生産された知多木綿のほとんどは伊勢の白子に送られ、そこで晒し加工がなされ、伊勢晒とか松阪晒として江戸に出回った。大野村買次問屋浜島伝右衛門が江戸で木綿問屋を開業したのは、貞享3年(1686)であったが、それ以前は、操綿商人だったと伝えられる。浜島家が大天馬町組に所属したのは享保頃のことであった⁽¹⁵⁾。大野は木綿仲買商の活動拠点であったが、知多木綿は尾州船によって江戸に送られるようになった。大野商人の渥美進出の目的は、江戸に送る木綿の集荷のためであると考えられる。

渥美半島でも戦後直後の物不足の頃、旧家では、綿を植え、高齢者が自家用に綿打ち、糸取りをし、機織り機を持ち出してきて家族用の下着をまかなったという。古い農家

では、綿打弓から縫格、紬車、延台、織機(はたご)など一連の綿布調製のための道具を保有していた家もあったという。綿については、『田原町史中巻⁽¹⁶⁾』にも、「農家の婦女子が夏季に綿花を栽培して収穫し、農閑期の冬季に自分の手で糸を紡ぎ、糸をのべて布を織ったものである。綿種を蒔くから布にするまで一切の処理工程は農家の家庭仕事として営まれた。こうして出来上がった綿布は通常小買人(棒手振)によって買い集められ中継ぎ業者に売られて、集散地の問屋に渡され一般に供給された」という記述がある。さらに、田原の船倉湊で貞享元年10月10日より12月26日までの間に入津した船の貨物の中に、米、麦、粟、稗、大豆、干鰯、酒、酢、粕、溜、多葉粉、炭、大豆、茶などの中に並んで綿と実綿がある⁽¹⁷⁾。

さらに、畠村の南に山を挟んで隣り合い、太平洋に面する和地村医福寺に伝わる大般若経巻物裏打ち修理のための宝暦年間の寄付帳『大般若経奉加帳⁽¹⁸⁾』には、和地村を中心に赤羽根村、小塩津村、堀切村、伊良湖村など表浜側村々の庄屋や重立った人々29人に続いて、大野鍛冶忠右衛門、大野紺屋次郎右衛門、田原町中庄屋佐野の3人の名がある。大野鍛冶、大野紺屋が和地の寺のために寄付をするというのは、大野商人が渥美半島の三河湾側だけでなく太平洋側の集落まで、定期的に通い、商いをしていたことが想像される。奉加帳に出てくる大野紺屋次郎右衛門は、正徳元年畠村差出帳にある「傳助かし屋 壱軒 尾州大野北浦町 綿諸色 次郎右衛門」と同一人物ではないかと考えられる。

ただ、畠村にやってきた大野商人の名前は、『大野町史』、『常滑市史』に見つけることができない。推測であるが、渥美に来た商人達は、地元大野では、特に有力者ではなく、伊勢や名古屋など有力市場へ進出するには力不足で、販路拡大のために新しい市場を求めて、畠村に出店を出したのであろうか。18世紀初頭急増した入商人の急増した具体的な理由はつかめ

ない。

3 畠村村人の船とその後の大野商人

畠村村人の持ち船については、前出正徳元年(1711)『三河国渥美郡畠村差出シ御帳』によれば、にたり11艘の所有があり、「伊勢・尾張・三河塩浜所江塩薪熱田・名古屋薪木松葉柴積商船、或ハ運賃瀬取仕候」と記されている。船の大きさは、200石から150石積である。伊勢、尾張、三河の塩浜へ薪を持ち込み、塩を積み出している。熱田、名古屋へは、薪木、松葉、柴を運び、運賃の瀬取りもしている。大野への寄港については、熱田、名古屋へ向かう際は、容易いことだと思われるが、特に触れていない。大野商人の畠村往来については、自分の持ち船を使っていたのか、大野廻船を用いていたのか、畠村の船を利用したのか、分からない。所有者は、覚右衛門、与右衛門、惣左衛門、宗休、善八、文左衛門、五助、直右衛門(2艘保有)半七、善左衛門の10人である。そのうち善八、覚右衛門、善左衛門の3人は、先に触れた店持ち商人である。与右衛門、五助、(宗休と惣休は同一人物かもしれない)の2人は大野商人に家屋を貸している。

いさば船については、村に6艘あり、「浜方二干鰯取申節ハ運賃積申候、其外柴木薪船所々江商申候」と記されている。船の持ち主は、仁左衛門、善八、源左衛門、源三郎、惣次郎、惣太夫の6名である。

正徳元年の畠村差出帳に記されていた入商人は、その後どうなったか、元文3年(1737)と安永4年(1775)の畠村差出帳⁽²²⁾の商店の欄を見ていこう。

「元文三年(1737)」

一商店	四軒
内	
壹軒	佐右衛門
壹軒	尾州大野北浦町

壹軒	尾州大野北浦町	治郎右衛門
壹軒	尾州大野木之下町	権右衛門
一荷商人		四軒
内		

壹軒	鍋売	近江国栗田郡辻村	孫兵衛
壹軒	同断	近江国栗田郡辻村	甚兵衛
壹軒		尾張知多郡小倉村	藤助
壹軒		尾張知多郡北粕谷村	市助

元文3年(1737)は、商店4軒、荷ない商人4軒が存在するが、計8軒のうち地元商人は、佐右衛門ただ一人となる。商店の多くは他所の人の商うところとなる。正徳元年と較べて、世代交代もあると思うが、同一の名前は佐右衛門のみである。近江の鍋売商人の出身地は2人とも変わらないから、同族の縁者かもしれない。又、初めて知多郡小倉村、北粕谷村出身者があらわれる。

「安永四年(1775)」

一商店	八軒	
内		
壹軒	当村	佐右衛門
壹軒	尾州大野	宗平
壹軒	当村	源次郎
壹軒	当村	五郎右衛門
壹軒	尾州大野	市右エ門
壹軒	当村	代吉
壹軒	当村	利兵衛
壹軒	当村	藤助

この年、荷ない商人についての記載はない。8軒の商店の内、地元の人が6人、尾州大野の人が2人になって、数の上では、地元商人の数が、他所からの入商人の数を上まわる。元文3年の時と同じ名前は、畠村佐右衛門と尾州大野の宗平の2人を見るだけである。

明治2年の『明治二年己巳人数取調書上帳畠村⁽²³⁾』によれば、「一出店尾州知多郡大野木下町宗平より出店一軒 留守居人 畠村 利三郎」「他所より出居壹軒 人数 留守居人 壹人」とあり、大野からの出店は1軒のみになり、しかも通常は畠村の利三郎が店番をし

ている。明治2年の宗平は、安永4年(1775)の尾州大野宗平の子孫であろうか。さらに、元文3年(1737)尾州大野北浦町惣平とは、音が共通するが、関係があるか分からない。なお、この人数取調書上帳によれば明治2年の畠村の村外からの奉公人は56人(男35人、女21人)である。主な抱え主には、幕末から明治はじめにかけて割元や名主であった山本銀右衛門(4人)、山本儀左衛門(15人)、山本儀之松(4人)、造り酒屋であった鈴木権六(8人)などがある。3人以上の奉公人を抱える抱え主は7人である。奉公人の肩書きに店方売子が多く、他に下男、下女、船頭、大工、弟子とあるので、地元でも畠湊を中心に商工業が発達し、町場が形成されていったことが推測される。安永4年(1775)には、大野商人の店2軒、明治2年には出店1軒となり、畠村での入商人の活動は衰退する。渥美市場が狭いこと、海上交通の不安定さ、畠村での商工業者の成長がその原因と思われる。

おわりに

約300年前、大野を中心とする知多、名古屋、近江、幡豆などから多くの商人が畠村へやってきて商いをしたということは、興味深い事実である。しかし、彼らがどのような商行為をしたか、どのくらいの売り上げであったか、具体的なことは、分からない。『大野町史』、『常滑市史』では、大野商人の渥美進出は、全く触れられていない。又、宝永、正徳の頃の渥美での衣服や鍋の普及、飲茶の風習についての資料は『渥美町史資料編』には、取り上げられていない。『渥美町歴史編上』にも、具体的な記述はなく、入商人の活動についてはよく分からない。

しかし、僻村におけるひとつの個別の事例ではあるが、畠村や近隣の村々にとって綿、鍋、茶を扱う商人の進出は、新しい時代の到来を告げる大きな出来事であったと考える。自給

自足の経済が崩れ始め、いろいろな物をお金で買うようになる時、流通の担い手としての商人が活躍するようになる。麻に替わって衣類の中心になった綿は、保温性が高く、肌触りがよい。実綿から紡績し、織布する労働も麻に較べてはるかに効率が高かった。作業工程もいくつかにはっきり分けられた。分業できたことから自給自足の家内作業だけでなく大量に生産することができた。村明細書によくある農閑稼ぎの項には「男 薪とり、芝刈り、わら仕事 女 木綿稼ぎ」があげられていることが多い。畠湊に隣接する古田湊をもつ『古田村地誌材料調査簿』(明治20年11月)によれば、婦女子の副業について「薄き白木綿ノ機織ヲ業トシ其木綿ヲ以テ実綿ト交換シ利益ヲ得ル業ナリ、明治二三年頃ヨリ木綿交換営業人ナクシテ其業更ニナシ」という記述がある。時代は隔たっているが、この「木綿交換営業人」が大野商人ではなかったか。同じく明治時代前期について書かれた亀山村出身者桑名辰治の手記『七〇年の記録』がある。それには「明治二十年頃まで、此の土地に於ても綿を作ったものである。綿の作付けは砂利交じりの極めて乾燥良き地味でないといえないので、亀山の字中で之に適する地味は少く、従って其の作付をするものは三、四十戸位のものであった。然も是等の者も、只自家用を充たす程度に収穫し得るか、或は『替織』と称して手拭用の木綿を織り之を衣類用の綿と交換するぐらいのものであった」という文言があり、江戸時代、綿の植え付けや機織りがなされたことが推測できる。大野商人が畠村で商業活動を行うことによって、婦女子の機織り賃仕事により、渥美の人々にとって木綿が身近な存在になり、生活が豊かになったのではないだろうか。

18世紀初頭の渥美半島奥郷での煮炊き、飲茶の風習は定かではないが、鍋売2人、茶売5人の出現は、生活水準を向上させたと思われる。金属製か陶磁器製かも分からないが、

陶磁器製の鍋を金属製に替えたり、2つめ3つめの鍋を購入した人もいるだろう。茶についても、購入して飲茶する人々が増えたことを意味する。入商人の活動は、渥美の人にとって新しい時代の到来であった。

註

- (1) 深井甚三「水運と陸運」(岩波講座『日本歴史』第12巻、岩波書店、2014年)。
- (2) 青木美智男「史料にみる尾張国知多郡廻船惣庄屋中村家の盛衰」(『知多半島の歴史と現在』NO.1、1989年)、同「大坂市場を脅かした『内海船』の組織と運営」(『日本福祉大学経済論集』創刊号1990年)。
斎藤善之「近世後期における下り塩流通と内海船」(『知多半島の歴史と現在』NO.4、1992年)、同「下り米流通機構の変容と内海船」(同NO.6、1995年)。
- (3) 村瀬正章『伊勢湾海運・流通史の研究』法政大学出版会、2004)。
- (4) 青木美智男「近世の尾州知多半島沿岸村落と伊勢・三河湾沿岸諸都市」(『知多半島の歴史と現在』NO.6、1995年)。
- (5) 『尾張徇行記』(名古屋叢書続編第3巻寛文村々覚書(下)1966年)。
「寛文村々覚書」は、その村にとって主な交流先の村が記載される。例「一大野村より道法 名古屋へ八里・舟路八里 勢州桑名へ舟路七里 同山田へ舟路六里 同大湊へ舟路十三里 参州荊谷へ五里、渡海共ニ」。
- (6) 『知多郡之記』(名古屋叢書続編第8巻尾張徇行記(五)1969年)。
- (7) 渥美町史編さん委員会『渥美町史歴史編上巻』(1991年、539頁)。
- (8) 同上598頁。(『田原藩日記』・渥美町史史料篇)
- (9) 前掲註(7)、567頁。
- (10) 前掲註(7)、101頁。
- (11) 前掲註(7)、110頁。
- (12) 前掲註(7)、177頁。
- (13) 『常滑市史』(1976年、P234頁)。

- (14) 『大野町六〇周年記念』(大野町1950年)。
- (15) 林英夫『在方木綿問屋の史的展開』(塙書房1965年)。
- (16) 『田原町史中巻』(田原市教育委員会1975年)。
- (17) 村瀬正章『近世伊勢湾海運史の研究』(法政大学出版局1980年)。
- (18) 個人蔵。
- (19) 前掲註(7)、255頁。
- (20) 前掲註(7)、271頁。
- (21) 前掲註(7)、717頁。
- (22) 前掲註(7)、128頁、152頁。
- (23) 前掲註(7)、196頁。